

Title	日本語教育学の学術論文における複合動詞の使用実態に関する一考察
Author(s)	高, 娟
Citation	日本語・日本文化研究. 2014, 24, p. 104-114
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/51013
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

日本語教育学の学術論文における複合動詞の使用実態に関する一考察

高 娟

1. はじめに

本稿で扱う日本語複合動詞は「飛び出す」「取り上げる」などのような前の動詞（前項動詞）の連用形にもう1つの動詞（後項動詞）が結合したものである。

日本人の日常生活から評論や専門書など知的レベルの高い分野まで複合動詞は幅広く使用されている。森田（1994）によると、『例解国語辞典』の見出し語の40,393語のうち、動詞は4,622語で11.4%を占め、そのうち複合動詞は2,390語で動詞全体の51.69%である。また、姫野（1999）は、日常よく使われる語を組み合わせることによって、単純動詞では表し得ない様々な用法や表現を作り出す効果があると指摘し、複合動詞の使用を通して具体的な状態や動作を生き生きとした表現で描写することが可能になる。

しかしながら、日本語学習者は複合動詞をそれほど多く使用できず、使用しても適切に使いこなせないことが多い。また、陳（2008）では作文対訳データコーパス¹を利用して、書き言葉における母語話者と学習者との複合動詞の使用状況を考察した結果、学習者による複合動詞の使用頻度は母語話者の3分の1程度で少ない傾向にあるという結果が見られた。その結果、「留学生の作文などを読んでいると、複合動詞の使用が少ないのに気づく。そのせいか、語彙的にどことなく単調で、幼い感じを受けることが多い」と指摘されている（姫野1975）。

以上のことから、今後の日本語教育現場でのよりよい複合動詞の指導のため、書き言葉における複合動詞の使用状況に関する基礎研究の必要性があると考えられる。本稿は日本語母語話者によって書かれた学術論文を切り口として、書き言葉における母語話者の複合動詞の使用実態を調査することにする。

2 先行研究と本研究の位置づけ

本研究で学術論文を取り上げる理由として考えられるのは次のとおりである。村岡（2008）で述べられているように、学習者がレポートや論文で適切な文章を書くためには、「日記や随筆的作文、単純な意見文だけを作成」しては不十分であろう。日本語学習者にとって学術論文の作成は容易なことではなく、複合動詞の使用はさらに困難であることが予測できる。母語話者による学術論文における複合動詞の使用状況を把握し、提示できれば学習者への複合動詞の指導に有意義なことだと考えられる。

また、専門日本語における複合動詞の研究に関しては、入戸野・武田（2009）・村田（2008、2013）などが挙げられる。村田（2008）は、312編の資料²を対象に、論述的文章ジャンルにおける複合動詞の使用傾向を見るために、選択した26個の後項動詞の使

用頻度を調べ、それを小説・社説ジャンルの場合と比較した。調べた結果、「～だす」と「～こむ」は造語力が非常に強くて、複合動詞として多用されていること、また複合動詞全体の使用については小説・社説ジャンルの資料のほうが論述的文章ジャンルの資料より多いことが明らかとなった。

入戸野・武田(2009)は、『日本語教育のための合成語のデータベース構築とその分析』³、『岩波ブックレット』⁴(2007版)、『化学工学論文集』(2007)を利用して科学技術専門書に常用される複合動詞の使用状況を調査した。調査結果から、科学技術分野では、複合動詞の前項動詞と後項動詞の組み合わせの幅は狭く、同じ語が多数回使用されることや、ある種の複合動詞は常に受身で使われることにより、視点を事柄におく動詞として客観性をもった複合動詞に変容することなど、理工系特有の複合動詞の特徴を述べている。

以上の先行研究に基づいて、本稿では筆者が将来的にも携わる可能性の高い日本語教育という分野を取り上げ、日本語母語話者の学術論文を考察対象とし、複合動詞の使用状況と使用傾向を考察することを試みる。

3 研究目的と研究課題

今後の複合動詞の教育や習得支援に役立てるために、日本語教育の学術論文における母語話者の複合動詞の使用実態の一端を明らかにすることを研究目的とする。学習者の使用状況を調査する必要もあるが、それは今後の課題とし、本研究では扱わない。

本稿では、先行研究を踏まえて以下の研究課題を設定する。

課題 1：日本語教育の学術論文における各論文の母語話者による複合動詞の使用状況を調査する。

課題 2：日本語教育の学術論文における母語話者による複合動詞の全体的使用状況を調査する。

学術論文における複合動詞の習得支援を目指して課題 1 と課題 2 を設定する。課題 1 を通して各論文の中での複合動詞の使用状況を把握する。課題 2 の目的は複合動詞全体の使用状況を考察することである。学術論文の中で頻繁に使われる複合動詞とは何か、またどのような後項動詞、前項動詞を使用する傾向があるかを考察する。課題 1 と課題 2 を通して、学術論文の中で頻繁に使われる複合動詞グループが推測でき、教育上の複合動詞の指導に役立つと考えられる。最後に、課題 1 と課題 2 を踏まえて、本研究の結果を日本語教育に応用することを検討する。

4 調査概要

4.1 調査対象の選定

学術論文における母語話者の複合動詞の使用状況を考察するためには、定評のある論文が望まれる。そのため、本稿は日本語教育の領域で定評のある学術的論文集『日本語

教育』⁵を取り上げ、その中から母語話者が書いた計30本の学術論文を抽出する。

母語話者の複合動詞の使用状況を全体的に把握するためには、相当数の学術論文を用いた分析が必要だが、本稿では30本の学術論文に限定する。論文30本の総文字数はだいたい35万語台になり、データからみると決して少なくない⁶と考える。また、抽出する際、母語話者が書いた論文に限定する。母語話者以外の研究者によって書かれた論文、また外国人研究者と日本語母語話者が共同発表した論文は本研究の調査対象としない。

本稿は学術論文における複合動詞の使用状況を調査し、抽出された30本の学術論文を考察する。主に「題目」「要約」と「本文」の部分に目を向けて考察することにする。そして、「本文」の内容を考察する際、「表・グラフ」や会話分析の「発話データ」などは考察対象としない。更に、「本文」の中で挙げられている例文は非文の場合があるので、取り扱わないことにした。こうすることによって、母語話者が自ら使用する複合動詞のデータのみが調べられると考えられる。

4.2 データの抽出方法

本稿で分析対象とするデータの抽出方法としては、李ほか(2012)を参考にして、紙媒体の学術論文を電子テキスト化して複合動詞のデータを収集する。李ほか(2012)では語彙や文法項目の出現状況が網羅的に分析できること、手分析に比べて確認・抽出作業に漏れが少ないことなど電子テキスト化の利点を指摘している。そのため、本稿では手作業で複合動詞を抽出する方法を使わず、考察対象の学術論文を電子テキスト化して複合動詞のデータを抽出することにした。そして学術論文における複合動詞の例文を抽出し、例文集を作成した。その後、原文と照らし合わせて間違いがないことを確認した。

また、分析対象とする複合動詞のデータを整理する際、複合動詞の用字の差異や動詞の活用変化は同定して同じ動詞項目として扱うことにした。また、同音で漢字が異なる複合動詞については、文脈から意味を判断し、同じ意味を表す場合には一つの見出し語として扱うことにした。

5 結果とその考察

5.1 「課題1 各論文における複合動詞の使用状況」についての考察

30本の学術論文において複合動詞を含む例文は全部で608文あり、全体で延べ語数608語の複合動詞が収集された。論文一本につき平均20語が使用されていた。そして30本の論文における異なり語数を考察し、各論文の中で使用された複合動詞の異なり語を整理した。全論文中使用されている論文数が多い順に複合動詞を並べて、表1にまとめた。

表 1 各論文における複合動詞の異なり語

総合順位	複合動詞	論文数	総合順位	複合動詞	論文数
1	取り上げる	16	8	当てはまる	5
2	見なす	15		見出す	5
3	繰り返す	13		生み出す	5
4	取り入れる	11		受け取る	5
5	言い換える	9		振り返る	5
6	結び付く	8	9	なり得る	4
	取り組む	8		当てはめる	4
	受け入れる	8		読み取る	4
7	成り立つ	6		取り除く	4
	見つかる	6		取り込む	4
	組合わせる	6		使い分ける	4
				思い出す	4
				引き起こす	4
				引き続く	4

そのうち、「取り上げる」という複合動詞を使う論文数をもっとも多く、30本の論文のうち16本の論文に使用されていた。次いで「見なす」が15本の論文で使用され、「繰り返す」は13本の論文で使用された。複合動詞を使用した論文の数が多ければ多いほど、この複合動詞は学術論文においてよく母語話者に使用される傾向にあると判断できる。また、表1の複合動詞のデータを考察した結果、多義性がある複合動詞は学術論文においては一つの意味に集中して使用される傾向が見られた。語彙の多義性に関しては、「学習者の困難点は、文章ジャンルを支える要因の一つとしての語彙の文体的特徴、およびアカデミック・ライティングの場合には特に必要な、曖昧さを排除し一義性を強く求める傾向も関与していると考えられる」（村岡2008）。そのため、学術論文の中で母語話者によく使用される複合動詞を詳しく見る必要があると思われ、以下では表1での総合順位1位から3位までの複合動詞「取り上げる」「見出す」「繰り返す」を取り上げて見ていく。

1) 「取り上げる」

30本の学術論文のうち、「取り上げる」を使う論文数は16本であった。姫野（1999）によれば、「取り上げる」の意味特徴は「上昇—全体的上昇—空間的上昇—対象の上昇」に分類された。辞書によれば、「取り上げる」は多義性がある複合動詞であるが、学術論文においては意味が集中して使用されている。収集されたデータを分析すると、次の

例文の中で使用されているように、

文例 1) 「品詞を特別に**取り上げる**理由として、…」

文例 2) 「…、フレーズ・シャドーイング(phrase shadowing)を**取り上げ**、…」

「取り上げる」の意味は「問題として扱う」や「テーマとして採用する」という意味で、テーマ化を行う時に用いられている。論文の作成でも必須の語だといえ、学習者は知っておかなければいけない語彙だと思われる。また、「取り上げる」の活用形には、

文例 3) 「…、会話以外を扱っている課であってもその中で**取り上げられて**いる対話文は少なくないのできちんと勉強すれば会話に広がりを持たせることができると説明されている。」

文例 4) 「…、新聞等にも何度となく**取り上げられて**いるが、…」

などのように受身が多用されることが見られた。また、「特別に」「主に」などの副詞と一緒に用いられていた。さらに、名詞との結び付きを見てみると、「取り上げる」と接続する名詞は「項目、対話文、品詞、フレーズ・シャドーイング、文の自然さ、引用動詞、コンプリケーション、道教え談話、指導の対象、探索活動、指導、発話コミュニケーション、発話」などがある。

2) 「見なす」

「みなす」は、「見る」と「なす」で構成される複合動詞というより、一語として固定化していると認識される語彙的複合動詞である。30本の学術論文のうち、「みなす」を使う論文数は15本で、母語話者によく使用されることがわかる。「みなす」の意味については、収集されたデータを分析すると、次の例文の中で使用されたように、

文例 5) 「…、「文末候補」(文末表現+終助詞など)で区切られる単位を統語的な「文単位」と**みなして**いる。」

文例 6) 「…、単一メカニズムモデルはボトムアップ的なモデルであると**みなす**ことが出来る。」

「判断したり仮定したりして、そうだと決める」という意味が使用される。また、「みなす」の格形式は、全て以下の例文のように、

文例 7) 「以上3つの条件を含んだものを本稿では先行研究を引用する文と**みなす**。」

文例 8) 「…、コミュニケーション上のサポートを行う人材を製品開発プロジェクトのメンバーと**みなし**、…」

「～とみなす」という形で使用される傾向がみられ、活用形としては「みなせる」「みなされる」などはデータの中から観察できた。さらに、名詞との結び付きを見てみると、「～とみなす」と接続する名詞は「統語的な文単位、学習事項、直接受身、非対格自動詞、超級、中国語の転移、情報システムの欠陥、言語的リソース」などがあり、接続する名詞から日本語教育分野の傾向が読み取れる。

3) 「繰り返す」

「繰り返す」は一語として固定化していると認識される語彙的複合動詞である。30本の学術論文のうち、「繰り返す」を使う論文数は13本であった。「繰り返す」の意味に関しては、データを考察してみた結果、「同じことを何度もする」という意味で使用されている。また、「繰り返す」の使い方については、以下の例文のように

文例 9) 「…、ひきこもりが「すごい問題」であることを繰り返して強調した。

文例 10) 「…、仲間は論拠に関連する他の重要な問いも繰り返して投げかけており、…」

「繰り返す V」という形で使用されている。即ち、副詞的に「繰り返す」と使用し、「反復。繰り返すこと。」という意味を表し、後ろの動詞の動作を修飾する。ほかは「繰り返す」を他動詞として、「～を繰り返す」という形で使用される。

総合順位3位までの複合動詞「取り上げる」「みなす」「繰り返す」を考察した結果、多義性がある複合動詞は学術論文においては一つの意味に集中して使用される傾向が見られた。このような複合動詞の意味や使い方は教育上、論文を書く必要がある学習者に優先的に指導するのが有効的だと考えられる。

5.2 「課題2 複合動詞の全体的使用状況」について

5.2.1 全体としての複合動詞の上位20項目

本研究で分析対象とした学術論文から複合動詞を抽出し、得られた複合動詞の延べ語数は608語のうち、異なり語数は204語である。そして取り出した複合動詞を延べ語数の多い順に並べ、頻出複合動詞の最上位20項目を表2にまとめた。また、複合動詞の最上位20項目のそれぞれの延べ語数及び複合動詞の総延べ語数に対する割合も表2に示した。

表2 複合動詞の上位20項目

順位	複合動詞	延べ語数	割合	級別	順位	複合動詞	延べ語数	割合	級別
1	取り上げる	28	4.6%	2級	11	生み出す	12	2.0%	—
2	見なす	28	4.6%	—	12	受け取る	11	1.8%	2級
3	繰り返す	28	4.6%	—	13	見出す	10	1.6%	—
4	取り入れる	24	3.9%	2級	14	見つける	10	1.6%	2級
5	話し合う	24	3.9%	2級	15	組み合わせる	9	1.5%	1級
6	言い換える	17	2.8%	—		割り当てる	9	1.5%	—
7	受け入れる	16	2.6%	1級	17	成り立つ	8	1.3%	—
8	結び付く	16	2.6%	1級	18	使い分ける	8	1.3%	—
9	取り組む	15	2.5%	1級	19	なり得る	7	1.1%	—
10	振り返る	12	2.0%	1級	20	書き直す	7	1.1%	—
上位20項目の総延べ語数：299 (49%)									

まず、上位20項目の延べ語数は299語で、総延べ語数608語の49%が上位20項目までに集中していることがわかる。このことから、日本語教育の学術論文の中に頻繁に使われる複合動詞グループがあることが推測できる。特に最上位3項目（「取り上げる」、「見なす」、「繰り返す」）の延べ語数は最も多くて、最大の28であった。また、5.1で述べたように、「取り上げる」「見なす」「繰り返す」を使用した論文数も上位3項目に入っている。これら複合動詞は、日本語教育において論文を作成するための、複合動詞の基礎語彙として参考になるものであると考えられる。

さらに、『日本語能力試験出題基準(改訂版)』を参考にして最上位20項目の難易度別に見てみる。表2では最上位20項目のうち難易度の低い3、4級のものは見つからなかった。また、2級と1級レベルの複合動詞はそれぞれ5項目で、日本語能力試験に所収されていない複合動詞は10項目であった。母語話者は難易度の高い2級、1級および日本語能力試験に所収されていない単語を使用する傾向がある。今後の複合動詞の指導上、複合動詞の最上位20項目は学習語彙として指導するのはもとより、日本語能力試験出題基準に所収されていない10項目も複合動詞の指導上においては重要な語だといえる。

5.2.2 前項動詞別と後項動詞別の使用状況

5.2.2.1 前項動詞別の使用状況

本稿では抽出された複合動詞を前項動詞別、後項動詞別に分けて整理した。抽出された複合動詞の前項動詞は全部で108種類である。そのうち、前項動詞上位15項目の延べ語数は395語で、複合動詞の総延べ語数608語の65%を占めている。前項動詞の上位15項目とそれぞれの延べ語数、及び総複合動詞延べ語数に対する比率を表3にまとめた。

表3 前項動詞の上位15項目

総合順位	前項動詞	延べ語数	割合	総合順位	前項動詞	延べ語数	割合
108種類	上位15項目	395/608	65%	8	引く	18	3.0%
1	取る	90	14.8%	9	書く	16	2.6%
2	見る	75	12.3%	10	組む	16	2.6%
3	受ける	32	5.3%	11	振る	13	2.1%
4	繰り返す	27	4.4%	12	読む	12	2.0%
5	話す	26	4.3%	13	当てる	11	1.8%
6	結ぶ	19	3.1%	14	生む	11	1.8%
7	言う	19	3.1%	15	使う	10	1.6%

表3で延べ語数が圧倒的に高いのは、「取る」「見る」の2動詞で、これらを前項動詞

とする複合動詞は、本調査における全複合動詞の約 26.1%を占めている。次に造語力の高い前項動詞は「受ける」「繰る」「話す」の 3 動詞で、これらからなる複合動詞を「取る」「見る」の結果と合わせれば、全複合動詞の約 41.1%を占めることになる。それ以下は徐々に延べ語数が落ちていく。

また、「取る」を前項動詞とする複合動詞の延べ語数は 90 語で最も多く、次いで「見る」を前項動詞とする複合動詞の延べ語数は 75 語である。「取る」を前項動詞とする複合動詞の異なり語数は 11 語で、「見る」を前項動詞とする複合動詞の異なり語数は全部で 18 語である。前項動詞「取る」「見る」からなる複合動詞を以下にまとめた。

表 4 「取る」を前項動詞とする複合動詞

	複合動詞	延べ語数
1	取り上げる	28
2	取り入れる	25
3	取り組む	15
4	取り巻く	5
5	取り出す	4
	取り除く	4
	取り込む	4
8	取り立てる	2
9	取りやめる	1
	取り纏める	1
	取り付ける	1

表 5 「見る」を前項動詞とする複合動詞

	複合動詞	延べ語数
1	見なす	28
2	見出す	10
3	みつける	9
4	見つかる	5
5	見当たる	3
	見習う	3
	見直す	3
8	見比べる	2
	見据える	2
	見通す	2
11	見抜く	1
	見渡す	1
	見かける	1
	見過ごす	1
	見計らう	1
	見立てる	1
	見守る	1
	見込む	1

5.2.2.2 後項動詞別の使用状況

本稿で洗い出した複合動詞の後項動詞は全部で 81 種類である。そのうち、後項動詞上位 15 項目の延べ語数は 408 語で、複合動詞の総延べ語数 608 語の 67.1%を占めている。このことから、頻繁に用いられる後項動詞項目は重点的に調査するに値すると考えられる。後項動詞の上位 15 項目とそれぞれの延べ語数、及び総複合動詞延べ語数に対する比率を表 6 にまとめた。

表6 後項動詞の上位15項目

総合順位	後項動詞	延べ語数	割合	総合順位	後項動詞	延べ語数	割合
81種類	上位15項目	408/608	67.1%	8	直す	24	3.9%
1	出す	50	8.2%	9	取る	21	3.5%
2	合う	46	7.5%	10	付く	19	3.1%
3	入れる	42	6.9%	11	換える	18	3.0%
4	込む	36	5.9%	12	付ける	17	2.8%
5	上げる	32	5.3%	13	得る	15	2.5%
6	返す	31	5.1%		組む	15	2.5%
7	なす	28	4.6%	15	合わせる	14	2.3%

表6で、「だす」を後項動詞とする複合動詞の延べ語数は50語で最も多く、複合動詞の総延べ語数608語に対して8.2%を占めている。次いで「あう」を後項動詞とする複合動詞の延べ語数は46語で、複合動詞の総延べ語数608語の7.5%を占めている。また、「だす」を後項動詞とする複合動詞の異なり語数は12語で、「合う」を後項動詞とする複合動詞の異なり語数は17語である。データから得た後項動詞「だす」「あう」からなる複合動詞は以下のとおりである。

表7「出す」を後項動詞とする複合動詞

	複合動詞	延べ語数
1	生み出す	11
2	見出す	10
3	思い出す	6
4	抜き出す	5
	作り出す	5
6	取り出す	4
7	導き出す	2
	選び出す	2
	引き出す	2
10	産み出す	1
	描き出す	1
	映し出す	1

表8「あう」を後項動詞とする複合動詞

	複合動詞	延べ語数
1	話し合う	24
2	学び合う	4
3	出し合う	2
	絡み合う	2
	向き合う	2
6	コメントし合う	1
	せめぎあう	1
	ぶつけ合う	1
	背反し合う	1
	読み合う	1
	高め合う	1
	共感し合う	1
	関係しあう	1
	認め合う	1
	書き合う	1
	与え合う	1
	伝え合う	1

5.2.2 で使用数の多い後項動詞及び前項動詞によって構成される複合動詞の中で延べ語数が多い複合動詞は、学術論文の中で特徴的な複合動詞だと考えられる。教育上、最優先の複合動詞と位置づけることができると考えられる。

6 まとめと今後の課題

本稿では、学術論文における母語話者の複合動詞の使用傾向を明らかにしようとした。抽出されたデータから複合動詞について量的考察を行った結果、全 30 本の論文で使用されている論文数が多い順に複合動詞を整理した。また、日本語教育分野の学術論文における使用数上位 20 語の複合動詞を同定した。そのほかに、前項動詞別、後項動詞別に抽出された複合動詞の使用状況について分析した。これらは学術論文で用いられる重要な語彙で、論文作成用の基礎語彙として学習者に優先的に教えるべきであると考えられる。

今後の課題としては、まず、今回抽出されたデータに基づいて、使用頻度の高い複合動詞の意味および文脈での使用状況を考察し質的分析を行いたいと考える。また「はじめに」で述べた姫野（1975）の問題点を解決するためには、学習者による複合動詞の使用状況を調査する必要があると考えられる。今後の調査では本稿の結果を参考にして、学習者が書いた卒業論文や修士論文などを対象として複合動詞の使用状況を考察したいと考える。

【参考文献】

- 影山太郎（1993）『文法と語形成』ひつじ書房
- 田中衛子（2004）「類義複合動詞の用法一考—日本語教育の視点から」『言語と文化』10 愛知大学語学教育研究室 pp.63-79
- 陳曦（2008）「日本語学習者と母語話者における日本語複合動詞使用状況の比較—作文データベースを用いて」『小出記念日本語教育研究会論文集』16 国際基督教大学日本語教育課程 pp.83-96
- 永井鉄郎（1996）「日本語複合動詞の教育について」『日本語教育』88 日本語教育学会 pp.140-151
- 入野修・武田明子（2009）「科学技術専門書に常用される複合動詞の調査分析」『福島大学地域創造』第 21 巻第 1 号 福島大学地域創造支援センター pp.128-147
- 姫野昌子（1975）「複合動詞・「～つく」と「～つける」」『日本語学校論集』2 東京外国語大学附属日本語学校
- 姫野昌子（1999）『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房
- 松田文子（2002）「複合動詞研究の概観とその展望—日本語教育の視点からの考察」『言語文化と日本語教育』お茶の水女子大学日本語言語文化学会研究会 pp.170-184
- 村岡貴子（2008）「専門日本語教育における語彙指導の課題」『日本語学』27—10 明治書

院 pp.60-69

村田年(2008)「文章と複合動詞—論述文ジャンルを特徴づける新たな指標を探して—」『日本語と日本語教育』36 慶応義塾大学日本語・日本文化教育センター pp.1-33

村田年(2013)「社会科学系書籍における複合動詞の使用傾向—後項動詞を指標として—」『日本語と日本語教育』41 慶応義塾大学日本語・日本文化教育センター pp.67-95

森田良行(1994)『動詞の意味論的文法研究』明治書院

李在鎬・石川慎一郎・砂川有里子(2012)『日本語教育のためのコーパス調査入門』くろしお出版

注

1 作文対訳データコーパスとは、国立国語研究所により作成され、1999年から2000年にかけてアジア10カ国から約1,100名分の作文データが収録されており、その総文字数は693,224である。

2 詳しく説明すると、経済学入門書、経済学論文、工学論文、物理学論文、文学論文、新聞社説、近代小説、現代短編小説などである。

3 『日本語教育のための合成語のデータベース構築とその分析』は、岩波国語辞典第6版(2000)、明鏡国語辞典(2003)、新明解国語辞典第6版(2005)、現代新日本語辞典改訂版第3版(2002)、三省堂国語辞典第5版(2001)、新選国語辞典第8版(2002)、集英社国語辞典第2版(2000)などの7冊の国語辞典を中心に、参考として『分類語彙表増補改訂版』(1984版)、『日本語能力試験出題基準』(1984版)の語彙を加えたものの中から、山下(2008)が総数16,040の接辞(接頭語、接尾語)や造語成分を収集したものである。

4 『岩波ブックレット』では、文章のジャンルを赤表紙(子供、教育など)、青表紙(医療、福祉、環境、暮らし、法律など)、緑表紙(戦争、平和など)、紫表紙(生き方、エッセイなど)、茶表紙(政治経済、歴史など)などの5種類に分かれている。

5 『日本語教育』の(2010年~2012年)の第145号から第152号までの中から30本の学術論文を選び出した。

6 例えば、上村コーパスの総文字数は317,224語である。またKYコーパスの総文字数は390,907語である。本稿で論文数を30本にする理由はデータの総文字数をできるだけ35万語台にしたかったためである。

本稿は、2014年9月に大阪大学大学院に提出した修士論文の内容の一部に加筆を施したものである。